

〔共同研究：「大学生」に関する総合的研究Ⅱ〕

新入生実態アンケート調査の分析（2）

「経済・生活状況」および「読書等」

木 下 栄 二

1. は じ め に

本稿は、拙稿「新入生実態アンケート調査の分析（1）「フェイス」および「大学（本学）の選択理由・入学後の期待等」（木下，2011）の続編である。今回は、2010年度まで実施されていた新入生実態アンケート調査のうち、新入生の「経済・生活状況」と「読書等」に関する設問の分析結果について報告する。

我々の共同研究では、現代大学生の特徴を把握するために独自の調査¹⁾を実施しているほか、大学内の諸機関が実施している既存調査の再検討・再活用という課題にも取り組んできた。本学に限定しても、授業評価をはじめ、大学生の特徴や、大学教育のあり方を考えるために重要と思われる調査が各種実施されている。既存調査データを最大限活用することも、大学生の特徴、変化の動向を把握し、有効な施策を立案・実施するために欠かすことのできない作業であろう。

特に、本学が2010年度まで毎年実施してきた新入生実態アンケート調査は、全新入生を対象とし、回収率もきわめて高い²⁾。また、基本的に同一の設問であるため、経年変化の分析にも適している（設問内容は本論末尾に掲載した2010年度調査票を参照）。かつては毎年冊子で配布されていたことを覚えている方もおられよう³⁾。この調査は、2004年度データよりエクセル形式でも対応可能となり、分析の汎用性が高まった。我々はこのデータを、統計解

1) 岩田（2012）参照。

2) 各年度の回収率（データ上のケース数／入学者数（2次手続き完了者数，入試課資料））は、2004年度98.1％，2005年度98.6％，2006年度98.2％，2007年度98.8％，2008年度98.6％，2009年度92.8％，2010年度88.9％である。ちなみに、学生生活委員会が実施している「桃山学院大学生の学生生活上の諸活動に関する実態調査（以下，学生実態調査と呼ぶ）」のうち，本学ホームページに掲載されている2008年度，2009年度，2011年度，2012年度の回収率と回答者数を紹介しておくと，2008，2009年度は郵送法で実施され，それぞれ24.4％（244人），23.5％（235人）という低い回収率である。2011，2012年度は授業を使った集合法で実施され，それぞれ49.7％（511人），35.1％（382人）（回収率は当該科目の履修者数を分母として計算）であった。新入生実態アンケート調査が，いかに貴重なデータであったかを示す結果である。

3) 筆者も，たまたま1995年度新入生実態調査アンケート報告書と2000年度新入生実態調査アンケート報告書を保存している。設問項目や選択肢が変わっている部分も多く，完全な比較はできないが，いくつか比較可能な部分については注のなかで紹介したい。

キーワード：大学生の質，既存調査の活用，新入生実態アンケート調査

析パッケージ SPSS に読み込ませ、さらに各年度のデータを結合させて、一つのデータファイルを作成した。

先の拙稿では、この調査の設問 1-16（「フェイス」および「大学（本学）の選択理由・入学後の期待等」）について、主に経年変化を概観した。そこでは、2004-2010年の7年間だけでも、一般入試から推薦入試へのシフト、受験雑誌離れの傾向がみられたほか、広く情報を集めるよりも、先生の勧めに従う素直な新入生の増加、就職や卒業など、近視眼的な目標を意識するばかりで、大学で学ぶことの価値を理解していない新入生増加の可能性を指摘した。

ただし、それは多岐にわたる設問項目のごく一部を概観したにすぎない。「むしろ、ここでの分析を一例として「このような分析はできないか」というリクエストや、自らの手で直接データを分析したいという希望が各学部学科や学内各所管から寄せられることを期待」し、新入生実態アンケート調査をはじめとする様々な既存調査が、多様な形で活用される呼び水になることを願ったのだが、残念ながらそのような要望やリクエストは皆無であり、おまけに新入生実態アンケート調査そのものが廃止された。まったく不徳の致すところであり、断腸の思いである。

しかし、大学や学生を巡る環境の変化はめまぐるしく、それに伴う学生気質の変化にも無視できないものがある。本稿では、2004年から2010年の7年間において、特に変化が顕著にみられた「経済・生活状況」と「読書等」に関する設問の分析結果について報告する⁴⁾。担当事務所管や各種委員会では、すでに自明のことかも知れないが、データを数字の形で示し、その要因について分析することで、さらに認識が深まり、そして担当以外の教職員にも認識の共有がされるとしたら、それだけでも意義のあることであろう。

2. 「経済・生活状況」（設問29—34）

（1）「経済・生活状況」の変化

①奨学金

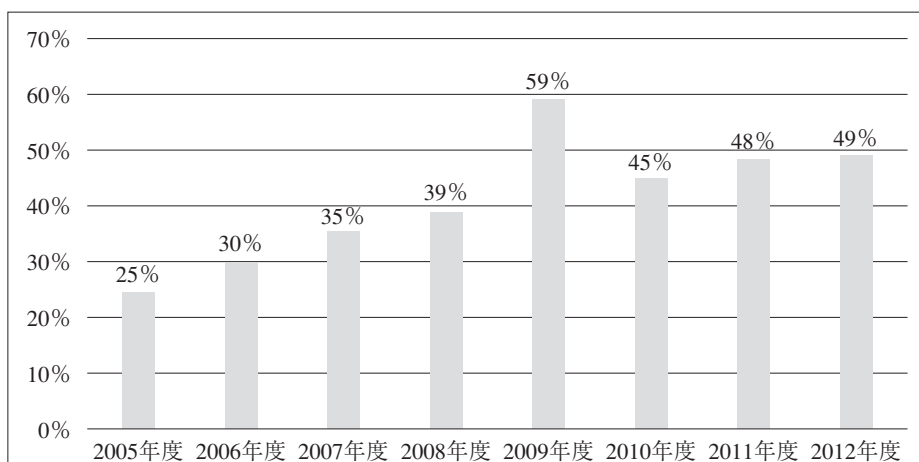
まず、大きな変化がみられる項目として、「経済・生活状況」についてみていこう。表1は、「奨学金の必要度」（設問31）を年度別に集計した結果である。2004年度には30.8%であった「必ず受けたい」が、2010年度には46.0%へと、15ポイント以上増加した。特に2009年度には、前年度よりも6.7ポイント増加している。

ちなみに、本学学生のなかで、日本学生支援奨学金受給者（第一種および第二種奨学金の合計）の比率を示したのがグラフ1である。2009年度に59%と、前年度よりも20ポイントも上昇し、その後も40%台後半で推移している。意識だけではなく実態としても、奨学金の重要度は高まっている。2009年度は、その前年にいわゆるリーマン・ショックがあった翌年で

4) 調査は新入生の自己申告であるため、若干のケースでは未記入や誤記入等もある。未記入や単純な誤記入は分析から除外したが、論理的に疑問のある誤記入等は判別が難しく、そのままの状態であることをご承知願いたい。なお、今回も留学生は分析から除外した。

表1. 奨学金の必要度

	実施年度	奨学金の必要度				合計
		必ず受けたい	希望するが受けられなければ仕方がない	考えていない	受ける必要ない	
	2004年度	520 30.8%	375 22.2%	643 38.1%	149 8.8%	1687 100.0%
	2005年度	548 32.8%	346 20.7%	631 37.8%	145 8.7%	1670 100.0%
	2006年度	595 36.5%	334 20.5%	578 35.4%	125 7.7%	1632 100.0%
	2007年度	592 38.0%	314 20.2%	545 35.0%	106 6.8%	1557 100.0%
	2008年度	642 39.1%	321 19.5%	554 33.7%	125 7.6%	1642 100.0%
	2009年度	758 45.8%	338 20.4%	456 27.6%	103 6.2%	1655 100.0%
	2010年度	692 46.0%	284 18.9%	451 30.0%	76 5.1%	1503 100.0%
	合計	4347 38.3%	2312 20.4%	3858 34.0%	829 7.3%	11346 100.0%



グラフ1. 日本学生支援奨学金受給者の推移 (学生支援課資料より作成)

ある。リーマン・ショックによる経済状況の激変が、学生たちの就職活動に与えた打撃の大きさはよく知られたことであろうが、そのほかの学生生活にも多大な影響を与えていた可能性が示唆される結果と言えよう。

もっとも、「本学の奨学金について」(設問30)をみると、「よく知っている」は7%前後で変わらない(表2)。しかし、「関心なし」が2004年度の26.7%から2010年度は18.9%へ減少し、「関心あるが親任せ」が19.7%から32.6%に増加している。回答者の多くが18歳であることを考えると、奨学金の内容まで把握するのは難しいだろう。しかし、たとえ「親任せ」であったとしても、奨学金への関心が増加している傾向は、この表にも示されている。

表2. 本学での奨学金について

		奨学金について				合計
		よく知っている	関心あるがわからない	関心あるが親任せ	関心なし	
実施年度	2004年度	129 7.6%	776 45.9%	333 19.7%	452 26.7%	1690 100.0%
	2005年度	105 6.3%	775 46.2%	385 23.0%	411 24.5%	1676 100.0%
	2006年度	123 7.5%	775 47.5%	362 22.2%	373 22.8%	1633 100.0%
	2007年度	101 6.5%	676 43.4%	438 28.1%	344 22.1%	1559 100.0%
	2008年度	114 6.9%	677 41.1%	480 29.1%	378 22.9%	1649 100.0%
	2009年度	125 7.5%	702 42.3%	524 31.6%	308 18.6%	1659 100.0%
	2010年度	108 7.2%	621 41.3%	491 32.6%	285 18.9%	1505 100.0%
	合計	805 7.1%	5002 44.0%	3013 26.5%	2551 22.4%	11371 100.0%

②学費納入手段・アルバイトの目的

「主な学費納入手段」（設問29）の経年変化を表3に示す。注目すべき変化として、第一に、「家庭から」という回答の2004年度の74.0%から、2010年度には63.1%へと10ポイント以上の減少が指摘できる。第二に、それではどこから納入するかというと、「奨学金」と言う回答が18.0%から32.2%へと増加している（「アルバイト代」は、変化なし、あるいはやや減少気味とすら言える）。この結果からも、奨学金の重要度の高まりがうかがえる。

主な学費納入手段には、あまり選ばれていないアルバイトであるが、その目的と必要度

表3. 主な学費納入手段

		学費納入手段						合計	
		家庭から	アルバイト代	奨学金	教育ローン	銀行借入れ	親戚等の援助		その他
実施年度	2004年度	1251 74.0%	65 3.8%	304 18.0%	46 2.7%	10 0.6%	8 0.5%	6 0.4%	1690 100.0%
	2005年度	1203 71.9%	76 4.5%	327 19.6%	36 2.2%	9 0.5%	14 0.8%	7 0.4%	1672 100.0%
	2006年度	1131 69.1%	54 3.3%	383 23.4%	43 2.6%	11 0.7%	9 0.6%	5 0.3%	1636 100.0%
	2007年度	1112 71.6%	41 2.6%	346 22.3%	27 1.7%	12 0.8%	11 0.7%	5 0.3%	1554 100.0%
	2008年度	1110 67.4%	41 2.5%	433 26.3%	36 2.2%	10 0.6%	10 0.6%	7 0.4%	1647 100.0%
	2009年度	1053 63.5%	30 1.8%	514 31.0%	41 2.5%	8 0.5%	7 0.4%	4 0.2%	1657 100.0%
	2010年度	948 63.1%	30 2.0%	484 32.2%	24 1.6%	4 0.3%	8 0.5%	4 0.3%	1502 100.0%
	合計	7808 68.7%	337 3.0%	2791 24.6%	253 2.2%	64 0.6%	67 0.6%	38 0.3%	11358 100.0%

表4. アルバイトの目的と必要度

		アルバイト目的と必要度							合計
		学費と生活費	学費	生活費	クラブ活動費	旅行・レジャー費	必要ないがよいのがあればする	考えていない	
実施年度	2004年度	349 20.7%	161 9.5%	477 28.3%	75 4.4%	378 22.4%	200 11.9%	46 2.7%	1686 100.0%
	2005年度	331 19.8%	166 9.9%	528 31.6%	65 3.9%	370 22.1%	168 10.0%	44 2.6%	1672 100.0%
	2006年度	354 21.7%	170 10.4%	497 30.4%	74 4.5%	316 19.3%	170 10.4%	54 3.3%	1635 100.0%
	2007年度	391 25.2%	153 9.9%	473 30.5%	58 3.7%	269 17.3%	132 8.5%	77 5.0%	1553 100.0%
	2008年度	405 24.5%	163 9.9%	509 30.8%	103 6.2%	250 15.1%	148 9.0%	75 4.5%	1653 100.0%
	2009年度	488 29.4%	164 9.9%	520 31.4%	60 3.6%	223 13.4%	138 8.3%	65 3.9%	1658 100.0%
	2010年度	459 30.5%	153 10.2%	447 29.7%	60 4.0%	195 12.9%	132 8.8%	61 4.0%	1507 100.0%
	合計	2777 24.4%	1130 9.9%	3451 30.4%	495 4.4%	2001 17.6%	1088 9.6%	422 3.7%	11364 100.0%

(設問34)を見ると、やはり注目すべき変化がみられる(表4)。ひとつは、「学費と生活費」と回答した割合の変化である。2004年度の20.7%が、2010年度には30.5%と10ポイント近く増加している。ふたつは「旅行・レジャー費」である。22.4%から12.9%へと、10ポイント近く減少している。

奨学金の必要性の高まりや、アルバイト目的の変化をみると、家庭に頼り切ることができず、奨学金やアルバイトによって、なんとか学業を継続しようとする学生の増加傾向をうかがうことができよう⁵⁾

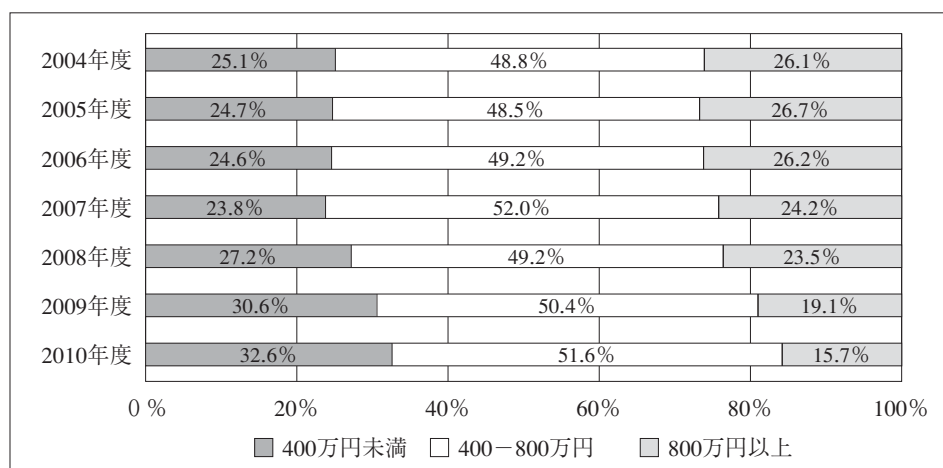
③主たる家計支持者の年収

年度別の「主たる家計支持者の年収」(設問32)を示したのが表5である。「400万円未満」が2004年度の25.1%から2010年度は32.6%へと増加している。よりわかりやすくするために、「400万円未満」「400-800万円未満」「800万円以上」に3区分し直したのがグラフ2である。「800万円以上」が26.1%から15.7%へと、10ポイント以上減少している。低年収層へのシフト傾向をはっきり見て取ることができる結果である。

5) 奨学金の必要度とアルバイトの目的については、1995年度、2000年度の結果と比較可能である。奨学金を「必ず受けたい」という回答は1995年度で19.1%、2000年度で23.1%である。アルバイト目的で「学費と生活費」との回答は、それぞれ12.1%、15.6%であり、「旅行・レジャー費」は、それぞれ27.4%、32.3%であった。現在とは全く異なる結果と言えよう。

表5. 主たる家計支持者の年収

		主たる家計支持者の年収（税込）						合計
		400万円未満	400万以上 600万円未満	600万以上 800万円未満	800万以上 1000万円未満	1000万以上 1500万円未満	1500万以上	
実施 年度	2004年度	403 25.1%	395 24.6%	389 24.2%	264 16.4%	123 7.7%	32 2.0%	1606 100.0%
	2005年度	394 24.7%	393 24.7%	380 23.9%	272 17.1%	117 7.3%	37 2.3%	1593 100.0%
	2006年度	380 24.6%	414 26.8%	345 22.3%	254 16.5%	116 7.5%	35 2.3%	1544 100.0%
	2007年度	352 23.8%	404 27.3%	365 24.7%	237 16.0%	99 6.7%	22 1.5%	1479 100.0%
	2008年度	420 27.2%	425 27.6%	334 21.7%	237 15.4%	96 6.2%	30 1.9%	1542 100.0%
	2009年度	476 30.6%	442 28.4%	342 22.0%	185 11.9%	80 5.1%	32 2.1%	1557 100.0%
	2010年度	466 32.6%	423 29.6%	315 22.0%	140 9.8%	61 4.3%	24 1.7%	1429 100.0%
	合計	2891 26.9%	2896 26.9%	2470 23.0%	1589 14.8%	692 6.4%	212 2.0%	10750 100.0%

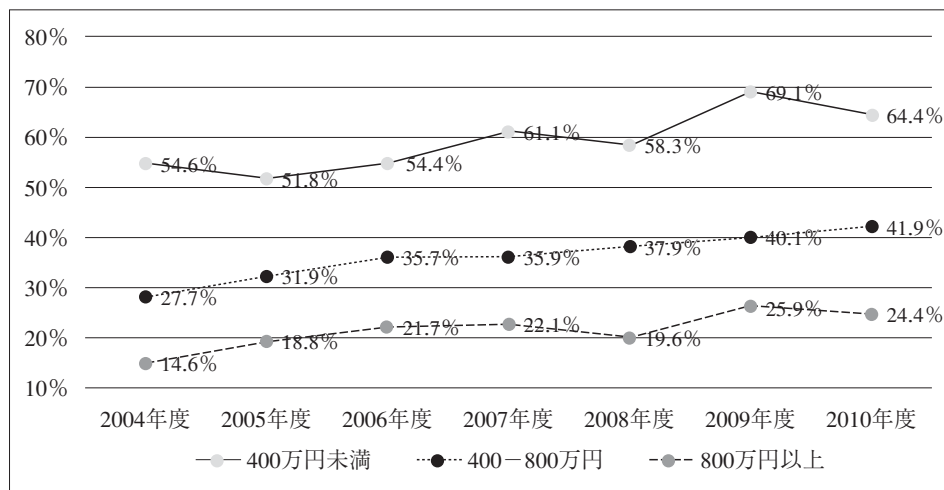


グラフ2. 主たる家計支持者の年収（3区分）

（2）年収別の変化

①奨学金の必要度

ここで、先に指摘した奨学金の必要度の高まり、アルバイト目的の変化が、年収とどのような関係にあるのか見ておこう。グラフ3は、年収3区分ごとに、奨学金を「必ず受けない」と回答した比率の経年変化を示したものである。年収によって回答比率に歴然とした差が存在するが、どの年収層でも近年上昇傾向がみられることも注目できよう。



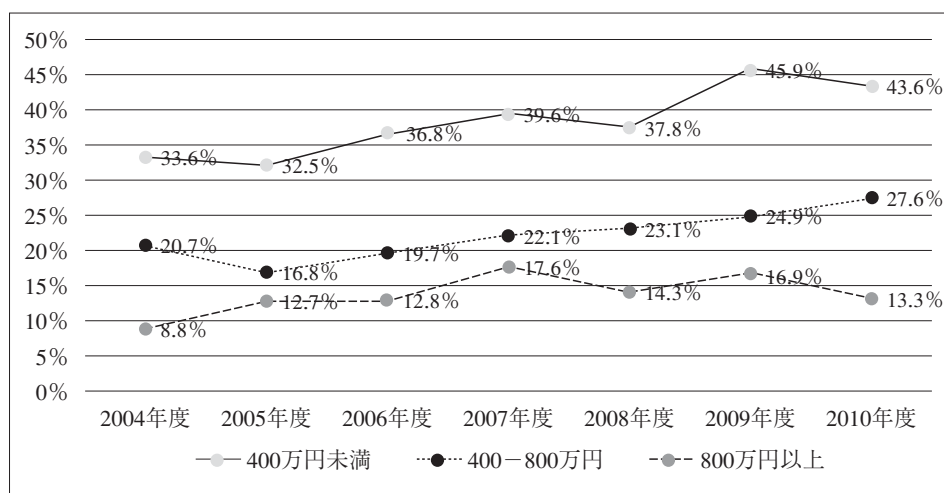
グラフ3. 奨学金「必ず受けたい」の推移 (年収別)

②アルバイトの目的

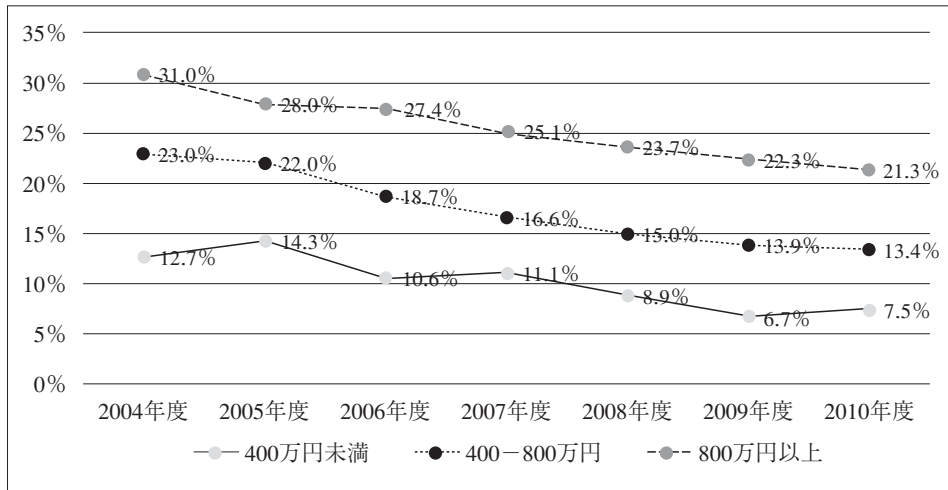
グラフ4に、アルバイト目的で「学費と生活費」と回答した比率の経年変化を示す。ここでも、年収による回答比率の差がはっきり存在する。しかしまた、「800万円以上」の動きはやや複雑だが、「400万円未満」「400-800万円」では、先と同様、近年になるほど、回答比率が高まる傾向がみられる。

グラフ5は、アルバイト目的で「旅行・レジャー費」の回答比率を年度ごと、年収層別に示したものである。ここでも、年収層ごとの差異は大きいですが、どの層でも、減少傾向にあることは注目できよう。

以上の結果から、第一に、奨学金の必要性、アルバイト目的は、家計支持者の年収によっ



グラフ4. アルバイト目的「学費と生活費」の推移 (年収別)



グラフ5. アルバイト目的「旅行・レジャー費」の推移（年収別）

て大きく規定され、近年の変化の原因は、低年収層の増加によることが指摘できる。しかし第二に、近年の変化は、それだけでは説明しきれないことも強調しておこう⁶⁾。グラフ3～5に示した通り、同一年収層のなかでも、奨学金を「必ず受けたい」という回答比率は増加傾向にあり、アルバイト目的が「旅行・レジャー費」という回答は減少傾向にある。低年収層の増加以外の要因（例えば、家庭環境の変化、大学に対する意識の変化等）を考慮する必要を示唆する結果と言えよう⁷⁾。

3. 読書をめぐって（設問47-50）

（1）「読書をめぐる諸項目」の変化

①公共図書館の利用

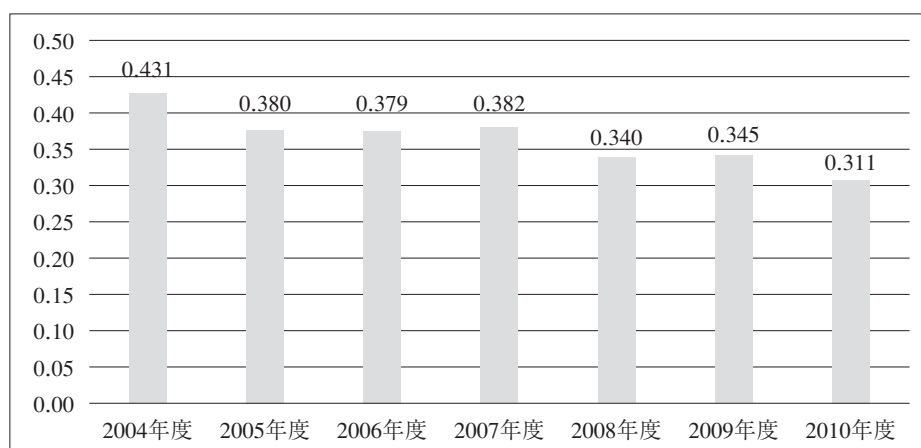
読書に関する設問群にも、興味深い（やや残念な）変化の傾向がみられる。まず表6に、公共図書館の利用頻度（設問47）を示そう。「利用したことなし」9.2%から13.0%、「ほとんど利用しない」51.2%から57.1%と、利用しない層の増加傾向がある。傾向を単純化してみるために、「月4回以上」に4、「月に2～3回」に2.5、「月に1回」に1、「たまに利用する」に0.3、「ほとんど利用しない」に0.1、「利用したことがない」に0をいうスコアを与

6) 試みに、年収3区分の比率が、2007年度と同一であると仮定して、2010年度の奨学金を「必ず受けたい」という回答比率を計算すると43.0%となる、2007年度の実際の回答比率は38.0%であるから、年収3区分の比率をコントロールしてもなお5ポイントの上昇である。同様に、アルバイト目的「学費と生活費」は27.9%で、2.7ポイントの上昇、アルバイト目的「旅行・レジャー費」は13.9%で、3.9ポイント下降している。

7) 残念ながら、同一年収層における変化の要因および低年収層の増加以外の要因については、ここでのデータだけではわからない。仮説的には、経済的要因以外の、たとえば大学や大学生活に対する意味づけの変化（就職予備校としか考えないなど）も想定できよう。しかし他方、同一年収層であっても、そのなかでより低年収化している可能性や、介護費用などによる支出の増大によって家計そのものがより苦しくなっている可能性も考えられる。

表6. 公共図書館の利用頻度

		公共図書館の利用頻度						合計
		月4回以上	月2～3回	月1回	たまに利用する	ほとんど利用しない	利用したことなし	
実施年度	2004年度	67 4.0%	72 4.3%	50 3.0%	480 28.4%	866 51.2%	155 9.2%	1690 100.0%
	2005年度	51 3.1%	62 3.7%	51 3.1%	468 28.0%	848 50.8%	190 11.4%	1670 100.0%
	2006年度	49 3.0%	65 4.0%	43 2.6%	446 27.3%	844 51.6%	189 11.6%	1636 100.0%
	2007年度	56 3.6%	55 3.5%	30 1.9%	391 25.2%	834 53.7%	186 12.0%	1552 100.0%
	2008年度	47 2.8%	53 3.2%	29 1.8%	395 23.9%	935 56.7%	191 11.6%	1650 100.0%
	2009年度	55 3.3%	45 2.7%	24 1.4%	405 24.4%	940 56.6%	191 11.5%	1660 100.0%
	2010年度	35 2.3%	40 2.7%	42 2.8%	334 22.2%	859 57.1%	195 13.0%	1505 100.0%
合計		360 3.2%	392 3.4%	269 2.4%	2919 25.7%	6126 53.9%	1297 11.4%	11363 100.0%



グラフ6. 公共図書館の利用頻度の推移 (平均値)

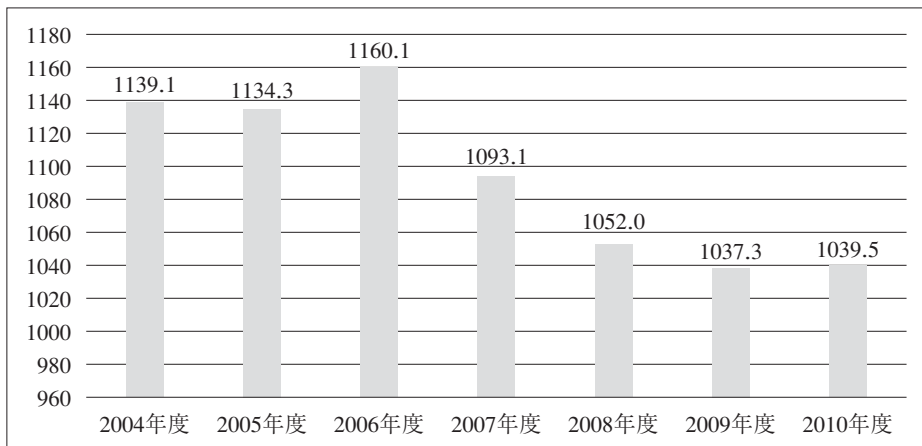
えて、年度ごとの平均値を示したのがグラフ6である。2004年度には、1か月に平均で0.431回の利用があったが、2010年度には0.311回へと減少している。

②読書に要する費用

読書に要する費用(設問48)では、「千円未満」が62.7%から70.8%へと増加している(表7)。ここでも傾向を単純化してみるために、「千円未満」に500、「千円以上2千円未満」に1500、「2千円以上3千円未満」に2500、「3千円以上4千円未満」に3500、「4千円以上5千円未満」に4500、「5千円以上1万円未満」に7500、「1万円以上」に10000というスコアを与えて、年度ごとの平均値を示したのがグラフ7である。2006年度にはいったん上昇し

表7. 読書に要する費用（1か月）

		読書に要する費用（1ヶ月）							合計
		千円未満	千円以上 2千円未満	2千円以上 3千円未満	3千円以上 4千円未満	4千円以上 5千円未満	5千円以上 1万円未満	1万円以上	
実施 年度	2004年度	1062 62.7%	420 24.8%	124 7.3%	45 2.7%	15 0.9%	15 0.9%	12 0.7%	1693 100.0%
	2005年度	1083 64.7%	387 23.1%	118 7.0%	42 2.5%	13 0.8%	17 1.0%	15 0.9%	1675 100.0%
	2006年度	1058 64.7%	372 22.7%	118 7.2%	38 2.3%	9 0.6%	27 1.7%	14 0.9%	1636 100.0%
	2007年度	1036 66.5%	354 22.7%	97 6.2%	22 1.4%	21 1.3%	16 1.0%	12 0.8%	1558 100.0%
	2008年度	1158 70.1%	316 19.1%	92 5.6%	37 2.2%	22 1.3%	21 1.3%	7 0.4%	1653 100.0%
	2009年度	1172 70.5%	324 19.5%	87 5.2%	36 2.2%	13 0.8%	20 1.2%	10 0.6%	1662 100.0%
	2010年度	1067 70.8%	280 18.6%	91 6.0%	21 1.4%	21 1.4%	21 1.4%	6 0.4%	1507 100.0%
	合計	7636 67.1%	2453 21.5%	727 6.4%	241 2.1%	114 1.0%	137 1.2%	76 0.7%	11384 100.0%



グラフ7. 読書に要する費用の推移（平均値）

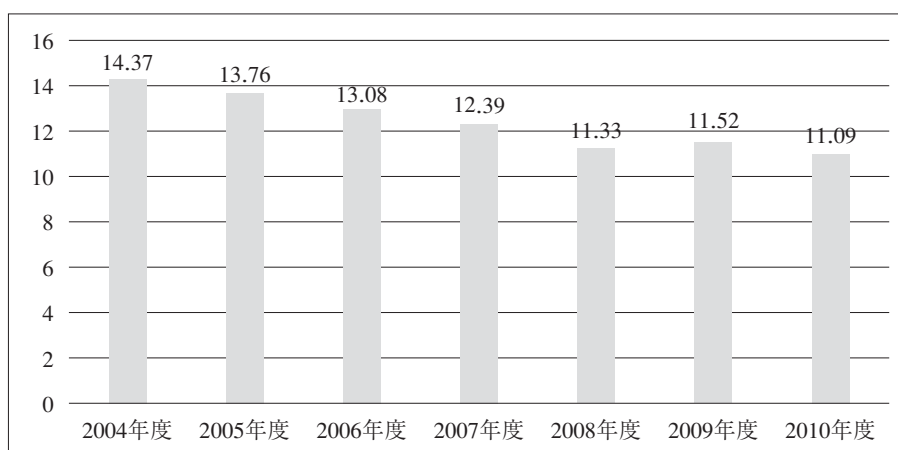
たものの、2007年度に急減し以降も回復傾向がみられない。2004年度と2010年度を比較すると、約100円分の減少である。

③読書量

それでは、各年度の新入生は、どのくらい本を読んでいるのであろうか。1月に何冊くらい読むかという形で、「読書量について」（設問49）を問うた結果を、年度ごとに示したのが表8である。「読まない」という回答が、最も少ない2005年度には16.9%だったものが、2010年度には26.8%にまで増加している。嘆かわしいことである。ここでも同様に、「月に5冊以上」に60、「月に3～4冊」に42、「月に1～2冊」に18、「2か月に1冊」に6、「3～

表8. 読書量について

		読書量							合計
		月5冊以上	月3～4冊	月1～2冊	2ヶ月に1冊	3～4ヶ月に1冊	半年に1冊	読まない	
実施年度	2004年度	128 7.6%	181 10.7%	369 21.8%	191 11.3%	197 11.7%	309 18.3%	315 18.6%	1690 100.0%
	2005年度	123 7.3%	154 9.2%	378 22.6%	177 10.6%	222 13.2%	338 20.2%	284 16.9%	1676 100.0%
	2006年度	96 5.9%	170 10.4%	332 20.3%	199 12.2%	215 13.2%	326 20.0%	296 18.1%	1634 100.0%
	2007年度	97 6.2%	128 8.2%	317 20.4%	186 12.0%	210 13.5%	312 20.1%	305 19.6%	1555 100.0%
	2008年度	82 5.0%	120 7.3%	362 21.9%	135 8.2%	223 13.5%	379 23.0%	350 21.2%	1651 100.0%
	2009年度	94 5.7%	133 8.0%	317 19.1%	162 9.7%	191 11.5%	336 20.2%	429 25.8%	1662 100.0%
	2010年度	83 5.5%	112 7.4%	282 18.7%	127 8.4%	200 13.3%	300 19.9%	404 26.8%	1508 100.0%
	合計	703 6.2%	998 8.8%	2357 20.7%	1177 10.3%	1458 12.8%	2300 20.2%	2383 20.9%	11376 100.0%



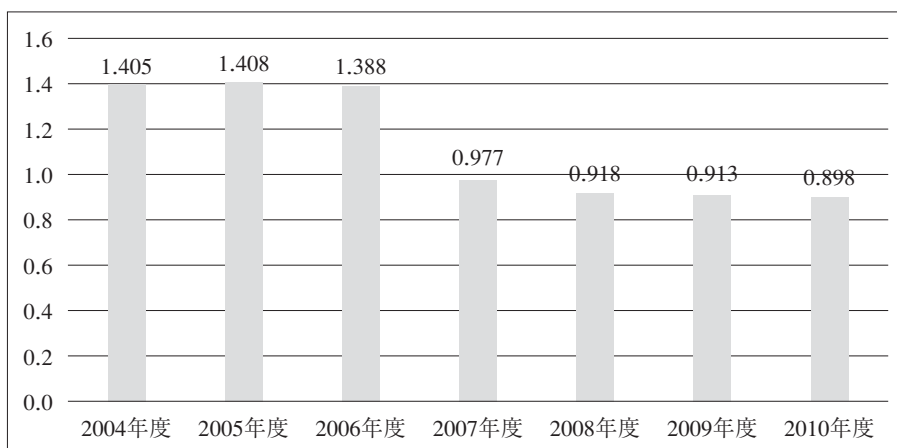
グラフ8. 「読書量」の推移 (平均値)

4か月に1冊」に3, 「半年に1冊」に2, 「読まない」に0というスコア(年間の冊数に置き換え)を与えて, 各年度の平均値を示したのがグラフ8である。2004年度の14.37から, 2010年度は11.09に減少している。大雑把に考えて, 年間約3冊分の減少である⁸⁾。

8) 読書量は, 1995年度, 2000年度の結果と比較可能である。同様のスコアを与えて平均値を求めると, 1995年度17.4, 2000年度13.9となった。この違いが偶然のものか, なんらかの要因によるのかここではわからないが, 興味深い違いである。なお, 読書時間についてカテゴリーが異なる(「ほとんど読まない」という選択肢がない)ため, 1995, 2000年度の結果, および学生実態調査との比較が難しいのが残念である。

表9. 1日あたりの読書時間

		読書時間（1日）							合計
		7時間以上	5～6時間	3～4時間	1～2時間	1時間まで	ほとんど読まない	まったく読まない	
実施 年度	2004年度	25 1.5%	65 3.8%	205 12.1%	453 26.8%	313 18.5%	441 26.1%	188 11.1%	1690 100.0%
	2005年度	43 2.6%	54 3.2%	190 11.3%	442 26.4%	299 17.8%	455 27.1%	194 11.6%	1677 100.0%
	2006年度	39 2.4%	62 3.8%	176 10.8%	394 24.1%	304 18.6%	486 29.7%	175 10.7%	1636 100.0%
	2007年度	24 1.5%	21 1.3%	88 5.7%	303 19.5%	298 19.1%	589 37.8%	234 15.0%	1557 100.0%
	2008年度	12 0.7%	33 2.0%	104 6.3%	272 16.4%	280 16.9%	669 40.4%	284 17.2%	1654 100.0%
	2009年度	23 1.4%	31 1.9%	91 5.5%	263 15.8%	286 17.2%	620 37.3%	347 20.9%	1661 100.0%
	2010年度	22 1.5%	24 1.6%	89 5.9%	222 14.7%	250 16.6%	573 38.0%	326 21.6%	1506 100.0%
合計		188 1.7%	290 2.5%	943 8.3%	2349 20.6%	2030 17.8%	3833 33.7%	1748 15.4%	11381 100.0%



グラフ9. 読書時間の推移（平均値）

④ 1日あたりの読書時間

読書時間の変化をみてみよう。表9に、「1日あたりの読書時間」（設問50）の年度ごとの結果を示す。2004年度は「まったく読まない」11.1%、「ほとんど読まない」26.1%だったものが、2010年度にはそれぞれ21.6%、38.0%に増加している。2010年度の新入生の約6割が、読書習慣を持っていないということになる。まったくもって嘆かわしいことである。ここでも、「7時間以上」に7、「5～6時間」に5.5、「3～4時間」に3.5、「1～2時間」に1.5、「1時間まで」に1、「ほとんど読まない」に0.3、「まったく読まない」に0というスコアを与えて、各年度の平均値をグラフ9に示す⁹⁾。2004年度に約1.4時間だったものが、2010年度には約0.9時間に減少している。約30分の減少である。また、注目すべきことは、

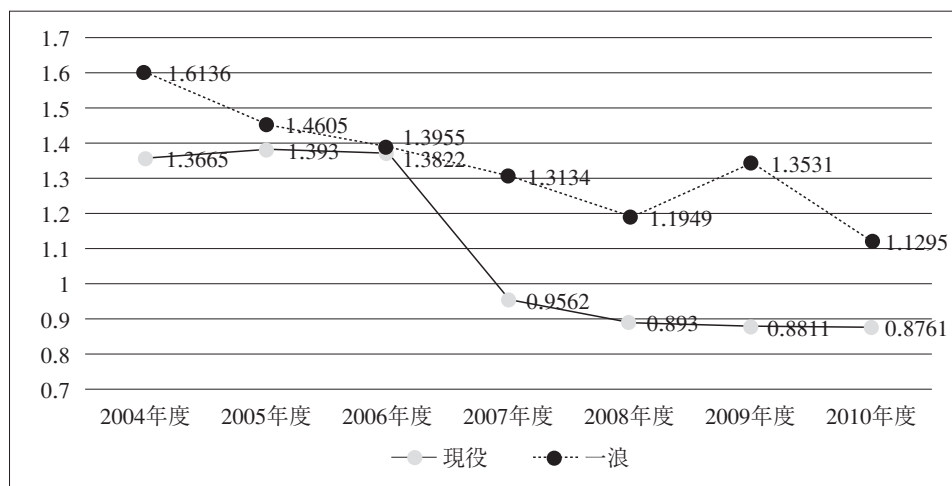
大きな変化が2007年度にみられることである。前年度の1.388から、0.977へと、時間に戻すと約20分急減している。

(2) 「読書時間」の規定要因

①2007年度に何が起こったか？

読書に関する4つの設問のなかで、最も変化量の大きい「読書時間」を取り上げて、さらに若干の分析を加えてみよう¹⁰⁾。「読書時間」の経年変化のなかで最も顕著なのは2007年度における激減である。何が起こったのであろうか。2007年とは、実は大学にとって、「ゆとり」の成果受け入れ元年であったのである¹¹⁾。そこで、ゆとり教育の影響を確認するために、現役入学者と一浪しての入学者に分けて、読書時間の推移を示したのがグラフ10である。現役入学者では2006年度の1.3822から2007年度0.9562へと0.4以上の減少を示すが、一浪しての入学者が2007年度も1.3134と前年度(1.3955)とそれほどの違いはない。いわゆる「ゆとり教育」の成果が、読書時間を激減させた大きな要因(少なくとも一つ)であるようだ。

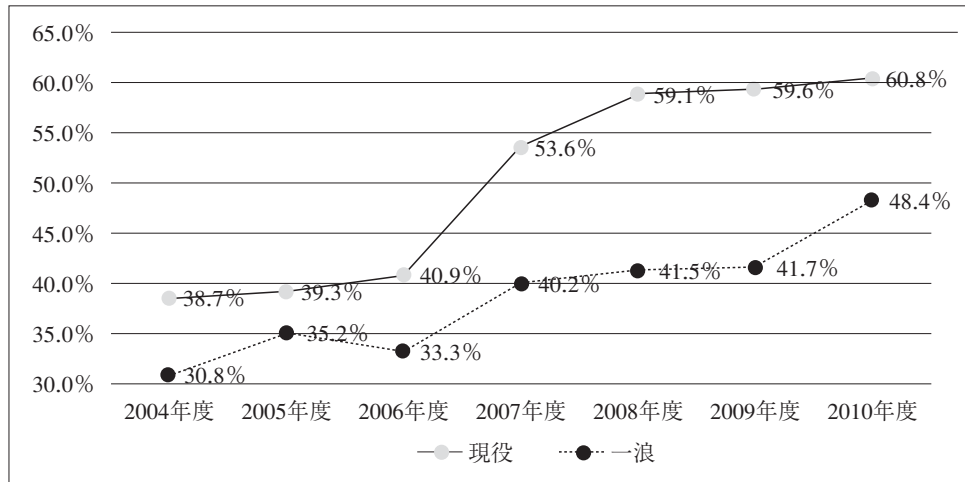
それでは読書時間の平均値の差はどのようにして生み出されるのだろうか。誰も読書時間が1時間弱に収斂したというのなら良いのだが、どうやらそうではなさそうである。グラ



グラフ10. 読書時間の推移 (現役・一浪別)

(2006年度 現役1.3822, 一浪1.3955)

9) 6.5時間とか、4.5時間とか読書する人は、どこに回答するのだろうか。連続量の区切り方として、社会調査関連の授業では、毎年のように学生に注意する「つつこみどころ」である。
 10) クロス表やグラフだけでは、変化量を正確に読み取ることは難しい。そこで、年度ごとに差異がないと仮定しての χ^2 値(尤度比)とF値を示しておく。公共図書館利用頻度($\chi^2=83.553$, $F=3.370$), 読書に要する費用($\chi^2=88.119$, $F=2.619$), 読書量($\chi^2=152.455$, $F=9.093$), 読書時間($\chi^2=543.832$, $F=55.101$)となり、読書時間の年度別の変化が他に比べて大きいことがわかる。
 11) いわゆる「ゆとり世代」の厳密な定義には諸説があるが、ここでは後藤祥子も2007年を「大学の、「ゆとり」の成果受け入れ元年」(後藤, 2008)と述べていることを参考にした。



グラフ11. 「読書習慣無し層」の推移（現役・一浪別）

フ11は、「ほとんど読まない」あるいは「まったく読まない」の回答者を「読書習慣無し層」と考えて、二つの回答比率を合算したうえで、現役・一浪別に経年変化を示したものである。現役入学者では2007年度に53.6%と前年度よりも12ポイント以上増加し、2012年度にはなんと6割が「読書習慣無し層」となっている。つまり、この(大学としてはあまり歓迎できない)「読書習慣無し層」の増加こそが、読書時間の平均値を減少させている大きな要因なのである。

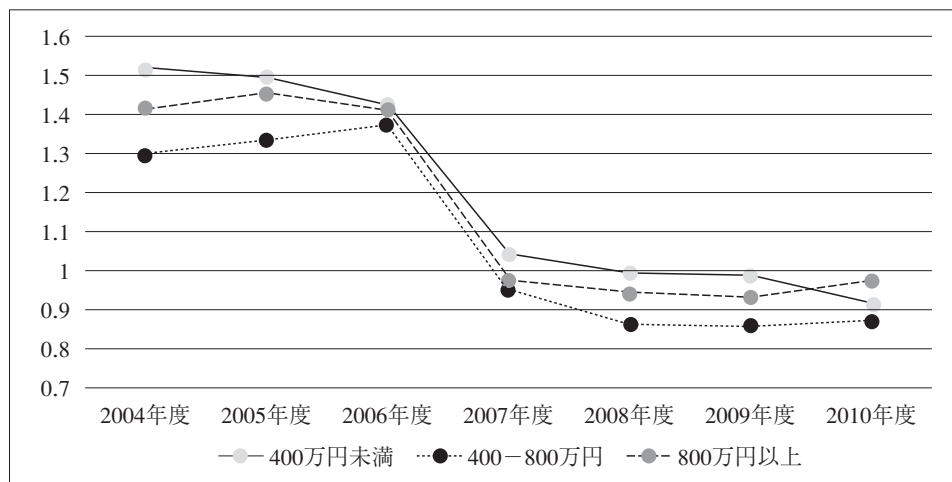
しかし、それでは2007年度以降の現役入学者と一浪しての入学者の差異は、何によって生じているのだろうか。「ゆとり教育」の成果では、2008年度以降の両者の差異を説明できない。浪人したら本を読むのか、本を読む高校生は浪人するのか、高校教育のあり方、大学入試における選別のあり方など、今後検討すべき課題の一つであろう（もっとも、現役入学者が圧倒的多数（85.2～92.9%）を占め、一浪での入学者は年々減少しているのだが）。

②年取層別の比較

読書時間を規定する可能性のある他の要因についてもみておこう。先述したように、近年「主な家計支持者の年取」は低年取層へシフトする傾向がある。年取層と読書時間は関連するだろうか。この点を確認するために、年取層3区分別に、読書時間の経年変化を示したのがグラフ12（データの値は略した）である。どの年度でも年取層による差異はない。

③インターネット利用と読書時間

情報化社会の進展は、紙媒体以外の情報ツールを飛躍的に発展させてきている。このことと読書時間はどのような関連があるのだろうか。まず、インターネット利用頻度（設問54）の経年変化をみよう（表10）。「ほぼ毎日」が2004年度の26.4%から2010年度には36.8%へと



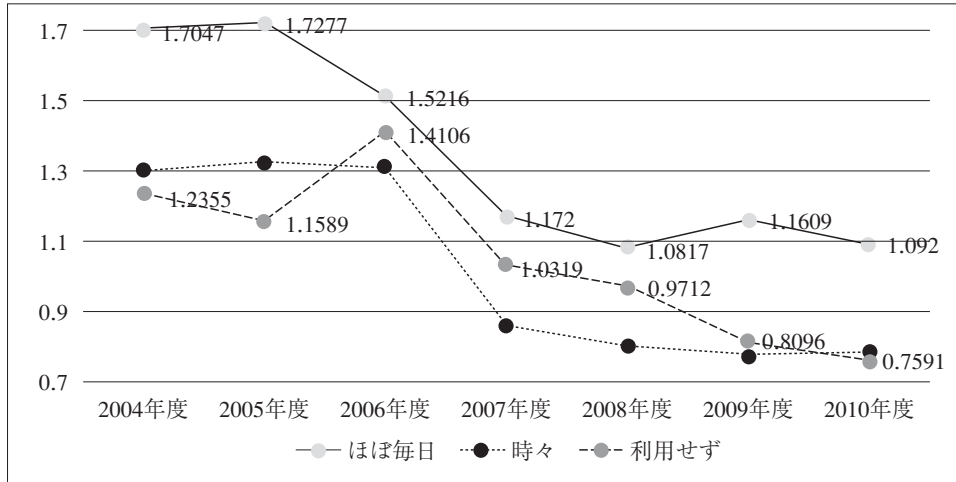
グラフ12. 年収層別の読書時間の推移

表10. インターネット利用頻度

		インターネット利用頻度			合計
		ほぼ毎日	時々	利用していない	
実施年度	2004年度	445 26.4%	913 54.2%	326 19.4%	1684 100.0%
	2005年度	422 25.3%	965 57.9%	280 16.8%	1667 100.0%
	2006年度	491 30.0%	965 59.0%	180 11.0%	1636 100.0%
	2007年度	492 31.6%	896 57.6%	167 10.7%	1555 100.0%
	2008年度	526 32.0%	967 58.7%	153 9.3%	1646 100.0%
	2009年度	564 34.0%	939 56.6%	156 9.4%	1659 100.0%
	2010年度	554 36.8%	825 54.8%	127 8.4%	1506 100.0%
	合計	3494 30.8%	6470 57.0%	1389 12.2%	11353 100.0%

10ポイント以上増加し、「利用していない」は逆に19.4%から8.4%へ10ポイント以上減少している。

それでは、インターネット利用頻度と読書時間の関連をグラフ13に示す。「ほぼ毎日」「時々」「利用していない」それぞれの読書時間の平均値は、年度によって差異に大小はあるものの一貫して「ほぼ毎日」が最も高い。この結果は、少なくともインターネット利用と読書が、対立する関係ではないことを示していると考えられよう。



グラフ13. インターネット利用頻度別の読書時間の推移

4. お わ り に

以上、2004-2010年度の新入生実態アンケート調査のなかで大きな変化が見られた「経済・生活状況」と「読書等」について概観してきた。

第一に、「経済・生活状況」では、奨学金の必要度が高まり、アルバイト目的も「学費と生活費」が増え、「旅行・レジャー費」が減少する傾向があった。この背景には、低年取層へのシフトがあるが、それだけでは説明しきれない何らかの要因への考慮の必要性も指摘した。

第二に、「読書等」では、公共図書館の利用、読書に要する費用、読書量、読書時間すべてにおいて低下傾向があった。とくに、読書時間の変化は大きく、読書習慣をもたない新生生の割合が6割近くになっていることは衝撃的ですからある¹²⁾。そしてこの変化には、「ゆとり教育」の影響が大きいことを指摘した。なお、俗説的に考えられる年取層やインターネット利用との関係では、年取層と読書時間は全く関連せず、インターネット利用では、むしろ頻繁に利用する方が読書時間の多い傾向すらみられた。

無論、以上の分析は限定的なものであり、視点を変えればさらに違う結果や解釈がありうるであろう。しかし、リーマン・ショックや「ゆとり教育」など、大学や学生を取りまく環境の変化はめまぐるしく、学生の質も変化していることには大きな違いはないと思われる。この変化を把握しようとせず、もしも90年代の学生像を念頭に施策を立案・実施したとしても、その有効性ははなはだ疑わしいものであろう。

12) いかにして学生たちに読書習慣を身につけさせるかが、我々の課題であるとも言える。本も読まないなど、就活以前の問題である。本学図書館のさまざまな取り組みに加えて、社会学部学生リーダー育成プロジェクトが実施している「ビブリオバトル」なども貴重な取り組みであろう。なお、ビブリオバトルについては谷口忠夫（谷口，2013）を参照されたい。

ところが我々は、学生の質の把握にどれだけ真摯に取り組んでいるのだろうか。新入生実態アンケート調査も無くなってしまった。この調査が最善であるとは思わないが、それではそれに代わるほどの、貴重なデータはどこにあるのだろうか。形式的な報告書を作成するためだけの PDCA ではなく、真の意味で PDCA サイクルを回していくためにも、いかにして学生の質を把握するか、全学的な議論が必要な時ではないだろうか。この小論が、今度こそ既存調査の活用や改善、新たなデータ収集・分析への模索の「呼び水」となれば幸いである。

参 考 文 献

- 岩田考, 2012, 「私立大学における専門教育とキャリア形成支援 (1): 4 大学の学生調査の比較分析 (共同研究: 「大学生」に関する総合的研究)」『桃山学院大学総合研究所紀要』第37巻第3号, 123-150ページ。
- 木下栄二, 2011, 「新入生実態アンケート調査の分析 (1) 「フェイス」および「大学 (本学) の選択理由・入学後の期待等」」『桃山学院大学総合研究所紀要』第36巻第2号, 89-107ページ。
- 谷口忠夫, 2013, 『ビブリオバトル 本を知り人を知る書評ゲーム』文藝春秋。
- 後藤祥子, 2008, 「「ゆとり」の功罪」『IDE 現代の高等教育』No. 498, 2-3 ページ。
- 本学学務課, 1995年度新入生実態調査アンケート報告書
- 本学学務課, 2000年度新入生実態調査アンケート報告書
- 本学ホームページ, <http://www.andrew.ac.jp/campuslife/support/chousa.html> (2013/12/03)

2010年度 新入生実態アンケート

新入生の皆さんの実態を把握し、今後の大学運営に役立てるため、アンケートを実施いたします。
 選びにくい場合でも、必ず1つの設問に1つずつ回答を選び、別紙マークシートにご記入いただきますようお願いいたします。

設問	1	2	3	4
----	---	---	---	---

フェイス

1 所属する学部・学科	1 経済学部 経済学科	2 社会学部 社会学科	3 社会学部 社会福祉学科	4 経営学部 経営学科
2 性別	1 男性	2 女性		
3 出身高校	1 国立	2 都道府県立	3 市立	4 私立
4 入試制度	推薦入学 1 (指定校制・評定特別)	推薦入学(公募制・ 2 専門学科・総合学科 選抜)	3 推薦入学(スポーツ)	4 AO入試
5 現役・既卒・留学生	1 現役	2 既卒(1年)	3 既卒(2年以上)	4 留学生
6 高校での課程 (近いものを選択)	1 普通科	2 英語科	3 理数科	4 商業科
7 出身高校所在地	1 東日本(含北海道)	2 中部(含新潟)	3 北陸	4 大阪
8 あなたにとって高校教育とは？	1 基礎的・一般的学問、 教育を修得できた	2 自己形成に役立った	3 社会的視野を開くこ とができた	4 対人関係をつくるこ とができた

大学(本学)の選択理由・入学後の期待等

9 本学志望を決めた時期	1 高校1年生	2 高校2年生 前半	3 高校2年生 後半	4 高校3年生 1学期 (夏休み含む)
10 本学志望に最も参考にしたもの	1 先生(高校・予備校) の勧め	2 家族や知人の勧め	3 高校、予備校での 進学説明会	4 大学展などの 進学説明会
11 最も参考にした受験雑誌等	1 リクルートブック	2 進研ブック	3 日本ドリコムブック	4 雪国時代
12 大学を選ぶ際の基準 (本学に限らない)	1 学習(カリキュラム) 内容	2 クラブ活動	3 地理的条件(通学時 間、下宿環境)	4 学費・奨学金
13 本学を志望した理由	1 キリスト教系の大学	2 校風が気に入った	3 外国語が十分学べる	4 学部の内容が希望に 合う
14 大学入学の目的	1 学問研究を通じ真理 を探究する	2 専門的知識・高度な 技術を修得する	3 豊かな教養を身につ け、人格を陶冶する	4 資格取得や、将来の 有利な就職を目指す
15 大学生活のイメージ	1 専門的な勉強ができ そう	2 友人をたくさん作れ そう	3 課外活動(クラブ等) に打ちこめそう	4 アルバイトがたくさ んできそう
16 本学に対する希望 (期待)	1 学力(専門知識や語 学力等)の向上	2 就職に役立つ教育 (資格の取得等)	3 個人の自主性の尊重	4 留年せず4年で卒業

学業等

17 本学で取得したい資格課程	1 教育職員養成課程	2 司書課程	3 司書教諭課程	4 博物館学芸員課程
18 卒業後の希望進路	1 民間企業	2 国家公務員	3 地方公務員	4 教員
19 進路のために身につけたい もの	1 専門知識	2 語学力	3 情報処理技術	4 資格取得
20 英会話力について	1 討論等で自分の意見 が述べられる	2 日常会話程度	3 自己紹介や挨拶程度	4 ほとんどできないが、 今後身につけたい
21 英語の経験	1 英語圏へ留学または 住んでいたことがある (3ヶ月以上)	2 英語圏へ留学または 住んでいたことがある (3ヶ月未満)	3 英語圏へ海外旅行を したことがある	4 英会話スクールに通 ったことがある
22 大学でどんな英語の授業を 受けていますか。	1 積極的なコミュニケ ーション力が身につく 授業	2 英文作成・読解力が 身に付く授業	3 言語や文化に関する 理解が深まる授業	4 外国の事情を紹介す る授業
23 卒業までにどのくらいの英 語力を身につけたいと思 いますか。	1 英語で仕事ができる 程度	2 英字新聞を読める程 度	3 外国人と日常会話が できる程度	4 外国人に挨拶や道案 内ができる程度
24 英語以外に学びたい外国語	1 フランス語	2 ドイツ語	3 スペイン語	4 イタリア語

課外活動(クラブ・ボランティア)

25 高校時の所属クラブ	1 体育系クラブ	2 文化系クラブ	3 生徒会等	4 その他
26 高校時のクラブ活動は？	1 人格形成に役立った	2 技術・教養を高める ことができた	3 よい友達をつくるこ とができた	4 勉強の合間の息抜き だった
27 本学で加入予定のクラブ・ サークル活動	1 体育系クラブ	2 文化系クラブ	3 サークル	4 まだ考えていない
28 どのようなボランティア活 動に参加したことがありますか	1 障害児・者関係	2 高齢者関係	3 医療・保健関係	4 災害援助関係

5	6	7	8	9	10
---	---	---	---	---	----

5 国際教養学部 国際教養学科	6 法学部 法律学科				
5 大検	6 その他				
5 一般入試前期A日程	6 一般入試前期B日程 B日程+1	7 一般入試前期 センター利用方式	8 一般入試 後期日程	9 一般入試後期 センター利用方式	10 その他
5 工業科	6 総合学科	7 国際科	8 体育科	9 その他	
5 近畿(含三重)	6 中国	7 四国	8 九州(含沖縄)	9 その他	
5 受験勉強だけだった	6 自主的・創造的な 活動ができた	7 自由な行動ができ なかった	8 その他		

5 高校3年生 2学期	6 高校3年生 3学期	7 高校卒業後			
5 受験雑誌	6 本学作成の大学 案内	7 本学ホームページ	8 キャンパス見学会 (オープンキャン パス)	9 高校・予備校 作成の資料	10 その他
5 日経進学ブック	6 学研マッチング ブック	7 君はどの大学を 選ぶべきか	8 予備校発行雑誌	9 その他	10 特にない
5 就職への有利さ	6 留学制度	7 資格取得	8 施設・設備	9 偏差値	10 その他
5 施設・設備の充実	6 先輩が在学してい る	7 就職に有利	8 地理的条件が合う	9 クラブ活動に 興味がある	10 他大学を不合格に なった
5 「大卒」の学歴が ほしい	6 課外活動を自由に する	7 学生生活を楽しむ	8 友達をつくる	9 その他	10 特にない
5 やりたいことが何 でもできそう	6 その他	7 特にない			
5 その他	6 特にない				

5 社会福祉士 受験資格課程	6 精神保健福祉士 受験資格課程	7 社会調査士資格	8 日本語教員資格	9 特にない	
5 社会福祉関係	6 各種団体	7 家業を継ぐ	8 自由業	9 進学	10 まだ考えていない
5 コミュニケーショ ン能力	6 問題発見解決能力 (論理的思考力)	7 その他	8 特にない		
5 ほとんどできない が、それでよい					
5 学校の授業のみ					
5 物語をたくさん読 み、感想を述べ合 う授業					
5 英語力を身につけ たいと思わない					
5 ロシア語	6 インドネシア語	7 中国語	8 朝鮮語	9 その他	10 特にない

5 不参加		
5 無意味だった	6 その他	7 不参加だったので、 わからない
5 加入しない		
5 地域活性化関係	6 その他	7 参加したことが ない

設問	1	2	3	4
経済・生活状況				
29 主な学費納入手段	1 家庭から	2 アルバイト代	3 奨学金	4 教育ローン
30 本学での奨学金について	1 よく知っている	2 関心はあるが、よくわからない	3 関心はあるが、親に任せている	4 関心はなく、ほとんど知らない
31 奨学金の必要度	1 必ず受けたい	2 希望するが、受けられない場合は仕方ない	3 別に考えていない	4 受ける必要がない
32 主たる家計支持者の年収(税込)	1 400万円未満	2 400万円以上600万円未満	3 600万円以上800万円未満	4 800万円以上1000万円未満
33 入学後の住居	1 自宅	2 下宿(本学紹介物件)	3 下宿(一般のマンション・アパート・文化住宅)	4 親戚・知人宅
34 アルバイトの目的と必要度	1 学費と生活費のため	2 学費のため	3 生活費のため	4 クラブ活動等のため
悩み・健康				
35 現在の関心事	1 学問研究	2 クラブ・サークル活動(体育系)	3 クラブ・サークル活動(文化系)	4 社会的諸問題
36 現在の悩み事	1 勉学のこと	2 健康や性格・能力	3 人生観	4 就職・将来の進路
37 困ったとき、悩んだ時の相談相手	1 友人	2 親	3 兄弟姉妹	4 先生
38 日頃の健康について	1 健康	2 おおむね健康	3 消化器系統(胃・腸・肝臓など)が弱い	4 呼吸器系統(喉・気管・肺など)が弱い
39 健康についての気遣い	1 非常に気を付けている	2 少し気を付けている	3 普通	4 あまり気にしない
40 飲酒について	1 飲めない・飲まない	2 たまに飲む	3 毎日のように飲む	
41 喫煙について(1日の量)	1 吸わない	2 5本未満	3 5本以上10本未満	4 10本以上20本未満
42 嫌煙について	1 隣で喫煙されても不快ではない	2 隣で喫煙されると不快だ		
43 睡眠時間について	1 3時間未満	2 3時間以上4時間未満	3 4時間以上5時間未満	4 5時間以上6時間未満
44 食生活について	1 3食決まった時間にきちんと食べる	2 3食食べるが、時間は不規則	3 朝食を食べないことがある	4 朝食はほとんど食べない
45 朝食を食べないことがある場合の理由	1 時間がない	2 食欲がない	3 経済的理由	4 ダイエットのため
46 ダイエット経験	1 ダイエット中	2 過去に経験がある	3 経験がない	
読書等				
47 公共図書館の利用頻度	1 月4回以上	2 月に2~3回	3 月に1回	4 たまに利用する
48 読書に要する費用(1ヶ月)	1 千円未満	2 千円以上2千円未満	3 2千円以上3千円未満	4 3千円以上4千円未満
49 読書量について	1 月に5冊以上	2 月に3~4冊	3 月に1~2冊	4 2ヶ月に1冊
50 1日あたりの読書時間	1 7時間以上	2 5~6時間	3 3~4時間	4 1~2時間
情報関連				
51 パソコン保有状況	1 自分用がある	2 家族と共用で、自分用がほしい	3 家族と共用で、自分用はいらない	4 所有する予定
52 ワープロ習得状況	1 早く打てる	2 普通に打てる	3 ゆっくり打てる	4 打てない
53 パソコンの主な利用目的	1 ワープロ	2 E-メール	3 インターネット(ホームページ)	4 ゲーム
54 インターネット利用頻度	1 ほぼ毎日	2 時々	3 利用していない	
55 所有している携帯電話キャリア	1 NTTドコモ	2 ソフトバンクモバイル	3 au	4 2つ以上持っている
56 本学ホームページについて	1 見たことがある	2 見たことがない		

5	6	7	8	9	10
5 銀行借り入れ	6 親戚等の援助	7 その他			
5 1000万円以上 1500万円未満	6 1500万円以上				
5 その他					
5 旅行・レジャー費	6 特に必要ではない が、よいのがあればやる	7 考えていない			

5 芸術・演芸	6 卒業後の進路	7 お金儲け	8 交友関係	9 その他	10 特にな
5 友達のこ	6 異性のこ	7 家族・家庭内のこ	8 学費・家計などの 経済的な問題	9 その他	10 特にな
5 カウンセラー等の 専門家	6 その他	7 相談する人がいな	8 誰にも相談したく ない		
5 循環器系統（腎臓 など）が弱い	6 肩こり・腰痛	7 不安感・イライラ 感・孤独感がある	8 その他 調子が良 くない		
5 全く気にしない					
5 20本以上					
5 6時間以上7時間 未満	6 7時間以上				
5 当てはまるものが ない					
5 食べたり作ったり が面倒	6 その他	7 きちんと食べるの で当てはまらない			

5 ほとんど利用しな い	6 利用したことがな い				
5 4千円以上5千円 未満	6 5千円以上1万円 未満	7 1万円以上			
5 3～4ヶ月に1冊	6 半年に1冊	7 読まない			
5 1時間まで	6 ほとんど読まない	7 まったく読まない			

5 所有する予定はな い					
5 その他					
5 その他	6 携帯電話を持っ ていない				

ご協力ありがとうございました。

Analysis of Survey Data on First-Year Students at Our University (2)

KINOSHITA Eiji

Through an annual survey of all freshmen at this university, we gather excellent data on our students. One purpose of this project is to analyze and utilize this data, which is useful for investigating changes among our students. Here, we have analyzed survey data gathered from 2004 to 2010.

In this paper, we report on analysis results regarding changes in student economic situation and reading activity. We hope that this information will be helpful to our faculties and sections, and of use in developing educational skills and services for our students.